

1-8

主題 多摩軽費老人ホーム 現状の課題と取り組み

介護予防

副題 ～事実上の介護予防施設としてのあゆみ～

研究期間 13ヶ月

事業所 軽費老人ホームA型 多摩軽費老人ホーム

発表者： 施設内 研究発表PJメンバー

アドバイザー：

共同研究者：自施設職員一同

電話 042-676-9710

メール info@tamakeihi.net

FAX 042-676-7310

URL http://www.tamakeihi.net/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

都内に9ヶ所、八王子市には1ヶ所しかないA型の軽費老人ホームです。豊かな自然に囲まれ落ち着いた自立生活を歩める、入浴食事付き高齢者アパートのような施設です。生活の自由度が高い反面、職員配置が極端に少ない為、生活全般は原則自己管理となります。約6万円からと、比較的低額な利用料設定である為、需要はかなり高く、入居待ちは5年以上の所もあります。

《研究前の状況と課題》

自立型施設と言われてきた軽費老人ホームも、ここ数年で全体的な虚弱化が進み、外部介護サービスを利用しても、隙間介護や夜間見守り・介助等、本来の業務を超えたものが必要な状況である。(排泄介助、入浴見守り、起居整容介助、服薬管理、外出受診支援、役所申請手続き等)

「元気な高齢者は在宅へ」という流れの中、入居対象者も大きく変化、要介護認定を受けた方や精神面の衰えが進んでいる方の相談も多くなり、実際に入居するケースも少なくない。行政からのDV対応など複雑なケースも多くなっている。

このような流れにより、入居者の状況も大きく変化、10年以上前から入居された方々も80、90を超え、虚弱化され、新しく入る方もすでに要介護状態。精神疾患、認知症の方も増え、支援の質・量ともに必要という

状況。年齢層も60代から100歳を超える方もおり、そのニーズも多岐にわたっている。また一方では、家族・保証人も、高齢化、遠方、仕事など、自身の世帯で一杯という状況。その中で、軽費老人ホームは今後どのようにあるべきか？を考えていく必要が生じ始めている。

《研究の目標と期待する成果》

今でこそ、全体的な虚弱化と、入居者の変化が生じ始めているが、それでもこの元気さ、自立度の高さの源は何であるのか？日常生活において在宅や他の施設と何が違ったのか？この点を改めて振り返り、明確にする事で、ご利用者にとって日々何が大事で、施設は何を求められているのか？がわかるのではないかと。また、今までの経緯をふまえた軽費老人ホームの今後の方向性を見出し、その存在意義・必要性を改めて示していく事ができるのではないかと。

《具体的な取り組みの内容》

年々進む心身の虚弱化に対して、自身の中での解決が出来なくなってきたご利用者から意見要望等が非常に多くなり、内容についても多様化、職員体制等、施設のソフト・ハードの限界もあり、対応について困難を極めた。

前年度、日々生じる課題・継続課題の解決に向けて、今までの現場業務（共用設備の衛生管理、行事・クラブ活動、等）および各部署の業務を極力維持しつつ新たな取り組みを行った。

○座談会の随時・定期開催

今まで行っていた年3回の利用者全員参加型での懇談会とは別に、同じ利用者参加型でもグループディスカッション方式を取り入れ、検討案件について課題提起し、1人1人の意見を極力吸い上げ、集計し、過半数以上で可決として同意を得た上で意見として示していく座談会を随時開催、都度生じる課題等、苦情解決委員会に直接出された内容について解決を図った。

検討された課題について、最終的な決定は懇談会にて改めて念を押すような形をとり、合わせて、修正した「くらしの手引き」の再配布、掲示物のこまめな更新、日々の声かけなど情報の発信と共有に努め、内容の変化などについてご利用者の意識を高く持てるよう心がけ、動いた。

《取り組みの結果と評価》

○意見・苦情・要望件数の減少

現時点で前年度と比較して意見箱への苦情は、ほとんどなくなって来た。アンケートでも総合的な満足度があがった。また、日々の雰囲気落ち着いているなど変化も見られた。

意見以前に具体的な相談が増えてきておりご利用者様と職員との間でのコミュニケーションが密になってきている。虚弱化による自己表現力・自己解決力の低下から、今まで継続できていたご利用者主体の形が保てず、結果として意見要望が増えたが、随時座談会という新たな取り組みがそのフォローとなり、ご利用者主体の再構築が一步前進したと考えられる。

前年度末にはご利用者から日頃の感謝として、有志によって行事が企画され、職員ともども楽しい一時を過ごす事が出来た。

《まとめ》

昔から取り組んできた内容も、今までの自立度の高さを作ってきた介護予防的活動であり、今後も元気な方のために継続していく事が重要であるが、年齢層の幅が広がり、自立度の高い方から虚弱化された方まで混在する現在の状況では、ご利用者主体という当り前の考え方を維持する為には今までの取り組みを継続しつつもその手法の変化や新規取り組みが求められる。

《提案と発信》

世間では、独居で軽介護度の出ている高齢者の具体的な受入施設が無い為に介護難民と呼ばれる人が出現し始めている。自立した人の居住施設としての軽費老人ホームであるが次の行き先については課題が残る。従来の軽費老人ホームの役割と現状の課題を見つめ直した時に改めて介護予防の重要性を痛感する。歩んで来た道のりと課題を見つめ改めて入居施設での介護予防の取り組みを検討する。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。